デジタルハリウッド大学

アドバイザリーボード会議

2023 年度

2024 年 2 月 7 日（火）14:00-16:30

[会　場] オンライン開催
[出席者]
前半 : 稲見昌彦、ドミニク・チェン、池谷和浩（事務局長・大学事業部長）、今田健一郎（大学院事務局長・大学事業部副部長）
後半 : 鮫島正洋、池谷和浩（事務局長・大学事業部長）、今田健一郎（大学院事務局長・大学事業部副部長）
[陪　席] 杉山知之学長※、小野妙子（大学事務局）※Zoom のチャット機能を用いた発言

[議事]
1　DHU（デジタルハリウッド大学）の活動についてのアップデート報告
2　自己紹介と活動共有
3　DHU2030 構想の観点から（教育課程、教員採用、社会広報など）
4　大学認証評価の観点から（理論と実務の架橋、業績指標など）

1. DHU の活動についてのアップデート報告
池谷事務局長よりアドバイザリーボードの背景と目的を説明した。また、この 1 年のデジタルハリウッド大学の活動や学生の募集状況等を報告し、生成 AI とメタバース社会実装後の大学が目指す姿（ヴィジョン）をアップデートする局面に差し掛かっていることについて説明した。

2. 自己紹介と活動共有
各ボードメンバーより、各々のビジネスや研究について近況報告があった。

（稲見氏）
・東京大学では、総長直轄で、部局や大学を横断した「スクールオブデザイン」や「カレッジオブデザイン」の構想を進めており、立ち上げに参画している。

・生成 AI に関しては、「生成結果を信じ込んでしまう悪影響への対峙」と「正誤判断に

必要な専門知の習得」がより重要となると考えている。あわせて、生成 AI 登場後も、残っていく活動としては、「推しエコノミー」と人間の代えが利かない「体験」であると考えている。

(鮫島氏)
・「オープンイノベーション」は、大学やベンチャーのためのものと捉えられてきた。しかし今は大企業でイノベーションを起こす源泉と受けとめられつつある。大企業とスタートアップの関係を従来の「元請け・下請け」から対等に、「ベンチャーファースト」の関係となるよう意識変革を契約書など法的部分で誘導してきた。意識変革は加速度的に進み、オープンイノベーションは経営のデザインツールである、と捉える動きがでている。

・生成 AI が契約や企業顧問などの弁護士業務にどう影響していくのかということは、常に思考しながら実務に臨んでいる。生成ＡＩの問題は、現段階では判例も出ておらず、学説すらないような状況の論点が多いため慎重さが求められる。

(ドミニク氏)
・テクノロジーとウエルビーイングの関係について、渡邊淳司氏と共著で３冊目を上梓した。理論的な研究や日本社会への適用という切り口から書いた１冊目２冊目から展開し、それをどうやってプロダクトやサービスデザインに昇華させるかということをまとめた。この書籍をもとにワークショップや企業の講習プログラムを行っている。

・パリの日本文化会館で招聘講演を行った。３つの日本語のコンセプト「ゆらぎ」「ゆだね」「ゆとり」をもちいて「発酵とウエルビーイング」について語った。

「ゆらぎ」・・・人間というのは常に変化し続ける
「ゆだね」・・・どこまでを委ねるのがその人にとって一番いいのか
　　どこまで委ねられるか
「ゆとり」・・・あるプロダクトが導く結果だけに価値を向けるのではなく、
　　その結果に至ろうとするプロセスそれ自体をどう価値化できるか

３つの軸をベースに、プロダクトやサービスをまさにデザインしていくと、市場にレッドオーシャン化している「どんどん便利になっていく」「人間が何もしなくても自動的にやってくれる」という、現在の市場において主流の考え方から少し異なるものが出てくる。

・ぬか床ロボット「ＮｕｋａＢｏｔ」がＳＩＧＧＲＡＰＨ賞を受賞した。「発酵」という物理現象に着想を得ながら、そこにどう生成ＡＩというものを組み込むと、人間のエクスペリエンスも発酵して醸成されていって、ある種の予測不可能な変化というものを人間が歓迎するような関係性というものをデザインできるか。そういう長い時間軸をどうデザインできるのかということに関心を持って研究を進めている。

3. DHU2030 構想の観点から（教育課程、教員採用、社会広報など）

大学事務局長より「DHU 2030 ProtoDesign」の概要と現在の課題を説明し意見を求めた。

（稲見氏）

・「自由を愛する文化を創造し続ける」を目指すことがすばらしい。しかも、それを「大切にする」のではなく、「創造し続ける」というところもよい。単なるリベラルスタンス教育とも違う側面が入っていて、非常に力強い言葉だと感じた。

・メタバースや VR は、生成 AI のキラーインターフェースだと考えている。ただし、まだあまり決定版はなく、生成 AI がコミュニケーションプラットフォームそのものになって、それをどう相互でレビューするようにできるのかというところがポイントになるのではないかとも考えている。そして、大学院がそういう取り組みをおこない、学生が表現のための道具として使っていくことになっていくのではないかと考えている。

・「社会人経験後に、一回最先端技術を学び直し、再度社会に戻る」というリプログラミングドアが設計しやすいのが貴学であり、「デジハリシステム」ではないかと考えている。一方通行になりがちな大学以上に強いという強みである。

・「人は人に集まる」。昔のようにシリコングラフィックスがあるから人が集まるという時代ではないので、飛びぬけた人が常にいる、もしくは、反対に学生と話しに来て帰ることで、自分も何か持ち帰れるものがあったと信じられるという経験をつくっていくことが大切である。貴学も、教員にとっても学生にとっても、デジタルハリウッドというコミュニティへの参加権ととらえる方が良いかもしれない。しかも、その権利は、授業料を払っている間とか、教員である間ではなくて、一生続けることもできるコミュニティだととらえても良い。

・産学連携や企業スポンサーがかかわる研究は、コストベースではなく「バリューベース」で研究費を決めようという考え方を東京大学では行っている。一緒にやることで新しい価値を創出して、その価値が企業価値をどう上げたかというところで研究費を決

めていきましょうというやり方にしている。

（鮫島氏）
・「自由」というのは、今の時代は規制されるのではなくて、自分たちで能動的に社会をつくっていくということを意味していると受け取った。法的な規制のみで律せられる世界ではなく、その規制線なり、生成 AI が普通に登場する社会の中で、人々がどういうふうに行動をしていくかというのはまだ読めず、そういった観点での先進国らしきものもない。自分たちが心地よい社会をつくっていくしかないという時代や環境になっていると感じる。だから、貴学は平仄があっていると感じるため、違和感は無い。

（ドミニク氏）
・「自由を愛する文化」を守るとかじゃなくて、創り続けるという表明は、貴学らしさがあり共感する。

・テクノロジーデザインのフィロソフィーの議論の中で、ポール・フェルベークというヨーロッパの哲学者がいて、リレーショナルセオリーを唱えている。
「テクノロジーカルチャーの界面を無限に拡張し、自由を愛する文化を創造し続ける」というミッションの前半部分が後半に係っているのは、人間は人間が作った道具によって、その行動や世界認識の仕方が規定されていくという考え方を前提とすると、作るとかエンジニアリングするということは、ただそういうものを作っているわけではなくて、その作ったものを使って、そのものによって影響を受けて、生き方を変える「人間をデザインしている」という彼の思想と通じると感じた。

・人文系の学部は、大学院への進学率が低いという悩みがある。工学系のような進学率となるような研究が人文系にもほしいと考えている。一方的に教える、教えられるという教育モデルが崩壊しつつある。工学系で 8 割、9 割が大学院進学ということは、学びそのものが面白いということが、伝播していることが背景ではないかとも受け取れる。

4. 大学認証評価の観点から（理論と実務の架橋、業績指標など）
事務局長より大学院の認証評価のピアレビューに対する大学の考えを説明し、意見を求めた。

（鮫島氏）
・検討課題や勧告についての改善対応は真摯に進めながらも、貴学の先進性や価値を失わない方法を模索すると良い。

最後に各委員に対して、全体の感想を求めた。

（稲見氏）

・アドバイザリーボードという形ではあるが、実は、毎年この時間が楽しみである。いろいろとむしろ学ばせていただくことも大変多く、これはこれで、また１つのデジハリコミュニティーだったのだと実感した。今後も相互にいろいろと相談させてほしい。

（ドミニク氏）

・貴学設置会社デジタルハリウッドの執行役員でもある池谷事務局長が、小説の文学賞「ことばと新人賞」を受賞されたことは、DHU2030 ProtoDesign を有限実行している。本当に素敵なことだと感じ、祝意を表したい。

最後に事務局長より、貴重なご意見を賜ったことと、引き続きご協力賜りたいとボードメンバーへ謝意を表した。

以上